

「沖繩と仏教」序説

—沖繩における仏教の歴史と現状—

長谷部 八 朗

一、はじめに

沖繩に仏教が将来されたのは、一三世紀後半であると伝えられている。しかるに、その後此の地でたどってきた道は、決して平坦ではなかった。当初、王権の厚い庇護を受けて、円覚寺・崇元寺のような宗廟を擁する名利を生んだが、一七世紀初めの薩摩支配により、厳しく活動を制限せられ、やがて明治期の琉球処分で国家的庇護を失った。こうして、政治体制の変化に伴い激しく翻弄され、ついには今次大戦の空襲で、あらかたの寺院が焼失してしまった。しかも、ノロ・ユタを基軸とする強固な在来信仰に行く手を阻まれて、民衆社会への十全な浸透をなしえなかったのである。その結果、「沖繩の生活では宗派仏教は取るに足りない要素である」とするW・P・リーブラのような見方が、沖繩仏教に対して向けられがちであった。⁽¹⁾ 沖繩学の中でこれまで、仏教研究がは

なはだ低調だった所以といえよう。しかし、リーブラがそう指摘してから二〇年以上たち、沖繩仏教にも、新しい動きが出て来た。葬祭需要がいや増す一方で、これからの仏教のあり方をめぐり、僧侶たちの模索が種々つづけられている。

本稿は、沖繩の仏教の実態を今後さまざまな角度から照射するための予備的考察として、当地に伝来した仏教の史的展開と現在の状況を概観することに主眼が置かれている。「序説」と付した理由である。

二、史的変遷と現在の状況

(一)、臨済・真言両宗の伝来

沖繩に仏教が伝えられたのは、『中山世譜』(一七二五)等によれば、中国の咸淳年間(一二六五—一二七四)であるとされる。禅鑑という僧が那覇に漂着した。どこから来たのか出自は不明だし、宗旨も判然としないが、ときの英祖王は、極楽

寺を建立してこの禅鑑を住持させたという。ほぼ同様の記述が『琉球国由来記』（一七一三）にもみえる。しかし、前書が「附」、後書が「傳聞」とことわた上で右の内容を載せている点から、その信憑性を支持するには一定の留保を要するとの見解もみられる。⁽²⁾ いずれにせよ、極楽寺は後継者を得ず、荒廢が進む。そしてその後移築され、尚泰久王治下の一五世紀半ばに來琉した臨濟宗南禅寺派の僧芥隱を開山とする龍福寺と名称を改めた。⁽³⁾ この芥隱がすなわち、琉球に日本から禅宗を伝えた嚆矢であり、熱心な仏教信奉者尚泰久の篤い帰依を受け、その支援下に、広嚴・普門・天竜・天界・天王各寺を創建した。さらに弘治年間（一五五五〜一五五八）には尚真王の外護により、王廟たる円覚寺の開山に迎えられている。のちに、尚寧王（一五八九年即位）の時代、北谷村出身の僧南陽紹弘が、臨濟宗妙心寺派を伝えた。爾来、妙心寺派が勢力を伸ばし、今日に及んでいる。

知られるとおり、臨濟宗と並んで沖繩における仏教の二大宗派の一翼を担ってきた真言宗は、芥隱來琉に先行することおよそ一世紀、察度王（一三五〇年即位）当時に、薩摩坊ノ津の龍巖寺一乘院の僧、頼重によつて將來された。一乘院は、鳥羽上皇の院宣で紀州根來寺の別院に推されると同時に、天皇の勅願寺でもあったという。⁽⁴⁾ したがって、琉球での寺院開創にあたり、やはり鎮護国家的役割をめざそうとしたものと

考えられる。建立された護国寺なる寺名もこのことと無関係ではないとの見方もある。⁽⁵⁾ 實際護国寺は、琉球王府の勅願寺として、当地真言宗の本山的位置を占めてきた。また尚真王の治世には真言僧日秀が來島し、金武村に観音寺を建て、阿弥陀・葉師・観音の三尊を祀った。ちなみに同寺は、沖繩戦の戦禍をまぬがれた本島唯一の寺院で現存している（ほかに宮古島の祥雲寺、石垣島の桃林寺がある）。しかも同寺は那覇・首里以外の地に建てられた寺院としては、最古のものである。護国寺を柱とする真言宗が琉球における国家鎮護的役割を担った史実は疑いえないが、その一方で、こうした観音寺のごとき村落を拠点に据えた寺院は、やはり農民の宗教的ニーズを埒外に置いては成り立ちえなかつたと推察される。この点に関して、『球陽』や『琉球国由来記』の日秀をめぐる記述がきわめて示唆的である。前書卷三の該当箇所を引例すれば、次のとおりである。⁽⁶⁾

首里より浦添邑に往くの間に、一高嶺有り。松樹茂盛し、濃陰重々たり。而して人烟隔つること遠く、最も幽僻の地たり。昔時、此の地甚だ妖怪多く、時々出で来り、詐変異貌して屢々行路の人を悩ます。日暮の時、人之れを驚惧して敢へて往来せず。時に日秀上人有り、金剛經を小石に写し、之れを此の嶺に埋め、即ち碑石を建てて以て妖魔を圧

す。其の碑石に金剛嶺の三文字有り。此れより来のかた、妖怪復は起らず、而して行旅の人も亦往還の安きを欣ぶ。

首里と浦添の間に妖怪頻出し、行路の人を悩ましたのを、日秀が経力を用いて鎮圧したというのである。この地は、いつの頃からか経墓と呼ばれるようになったと伝えられる。地元では、ウチョーモーと称して、地域の聖地となっている。

現在でも、七月一六日には祖霊を送るため、また一〇月一日のウマーチヌウグアン(火の御願)には火と水の恵みに感謝してウチョーモーを拝むという。

本例は観音寺の建てられた金武村に言及したものではないが、日秀の化導の在りようを知る上で興味深い。

このように、庶民や村落社会との交渉をうかがわせる史資料も散見されるが、しかし、沖縄に将来された仏教の基調はやはり、臨済・真言を両軸として国王の帰依・外護を受け、首里や那覇を中心に国家鎮護の祈願を管掌することであった。

(二)、浄土系仏教の伝来

此の地に浄土系仏教が伝来したのは、一七世紀に入ってからであった。尚寧王朝の一六〇三年、浄土宗僧侶、袋中が来琉している。明への留学を志した袋中は渡航を試みたが叶わず、帰途琉球に上陸し、三年の間留錫したのだった。その

間、国王尚寧の帰依を受け、儀間真常なる篤信の弟子をつくるなど、精力的な教化活動を展開し、『琉球神道記』五巻、『琉球往来』一卷を著している。だが、袋中が去ったあと、指導者なき浄土宗は次第に勢いを失ってゆく。そうした中で、わずかに垣ノ花・具志・小禄の各村に浄土信仰の命脈をつないできたが、昭和に入り、垣ノ花と具志は後継信者が途絶え、小禄のみが、「小禄浄土」の名の下に戦後まで法灯を絶やさずに来たと聞く。小禄では、四人の「浄土」と呼ばれる指導者を村内から推挙し、かれらを中心に古来伝わる念仏口誦の様式を実践していた模様である。しかし今日では、もはや確認することができない。

一九二三(大正二二)年、袋中の功績を顕彰して、尚寧王の手で開創され袋中が住持に請じ入れられたと伝えられる桂林寺跡に、「袋中上人行化碑」が建てられた。沖縄仏教連合会と沖縄史跡保存会の発起になるものである。さらに、一九三七(昭和一二)年には、垣ノ花に「袋中寺」が建立され、浄土宗の再興がはかられたものの、一九四四(昭和一九)年一〇月の大空襲で灰燼に帰した。そして一九七五(昭和五〇)年、同寺は、小禄の地に復興され、今日に至っている。

浄土真宗の沖縄伝来は、必ずしも明確ではないが、一九世紀前半であろうと目される。真宗の沖縄における展開は、きわめて特殊な状況のもとに行われた。つまり、こうである。琉

球は一六〇九（慶長一四）年、薩摩藩によって侵略され、その統制下に置かれた結果、寺院の修復・建立や僧侶の活動など、著しく制限されることとなった。他方、かの薩摩にあっては、一向宗（浄土真宗）に対する厳しい禁制が敷かれていた。いつ頃からそうした体制がとられるようになったのかは判然としないけれど、島津義弘の布達が一五九七（慶長二）年二月に出されており、「一向宗之事 先祖以来御禁制之儀に候条 彼宗体に成候者は曲事たる可き事」とあるところから、この時点より以前にすでに禁じられていたことがわかる。⁽⁸⁾

庶民の宗門改めは年二回位あったという。大概、禪宗などの寺院の庭に召集させられ、年寄・組頭・横目といった役人たち立ち合いのもと、一回は切支丹改め、そしてもう一回が一向宗改めであったといわれる。⁽⁹⁾

当然のことながら、かかる薩摩藩の政策は、征服後の琉球に対しても適用された。具体的には、一六二六（寛永一三）年、島津光久によって宗門改めが実施されるようになる。それから二〇余年経った一六五九（万治二）年の改めに関する史料には、以下のごとき起請文の提出を命ぜられているのがみえる。⁽¹⁰⁾

一、鬼利死丹宗旨の儀、前より御禁制の儀に候、此節もきびしく御法度仰せ出され候、我等扱中に鬼利死丹並に一

向宗男女一人も隠し置き申さず候事

一、勿論我等並に妻子下人に至る迄、鬼利死丹宗にて御座なく候事

一、以来も右の宗旨承立候はば直に披露申上ぐべく候事

かくて気づくとおり、おそらく真宗伝来以前に、あたかも機先を制するかのごとく沖繩には一向宗禁制が通達せられたのである。

そこに、禁制を犯して一向宗信仰に殉じた人物が出現する。仲尾次政隆が、その人である。彼の系譜をさかのぼると五代に、薩摩・久志ヶ浦から来島した一向宗信者中村宇兵衛がおり、持参した仏像を内仏として密かに信仰をつづけたとされる。仲尾次もそうした衣鉢を継いで同宗信仰に丹精し、文通を交わした久志ヶ浦の正光寺住職の紹介で本山から了覚の法名を授かったと伝えられる。そして、那覇の遊里である辻を拠点に遊女を主たる対象に定め教線を張った。遊廊という衆目の届きにくい場所を選んだのも、禁教信仰なるが故の、公儀の目を潜る一つの便法であったのだろう。果して、三百人を越える信者の帰依をみたという。これだけ信者が形成されると頻繁な遊廊への出入りはかえって目立つようになったのか、拠点を彼の自宅に移している。のちに仲尾次は、中山国二八日講と称する講社を結成する。が、結局その

潜伏活動も同志の密告により破綻をきたし、彼は無期徒刑囚として八重山への流刑に処せられた。信者たちも、流刑や所払い、寺入り、罰金などの処分を受けた。

このように、真宗は他宗に比したとき、ひとときの特異な歴史を刻んできた。それは、激しい弾圧をこうむったという意味のみでなく、弾圧をかわすために潜行することで、かえって庶民層との接点を広げたという点においても、他宗に比べ際立っている。もともと、一向宗禁圧は熾烈であったが、藩は基本的に、一向宗に留まらず仏教そのものを統制する姿勢をとっていたといえる。一六六三(寛文三)年の通達が、それを端的に物語っている。⁽¹¹⁾

侍町人に至る迄人を集め仏説の講談曾て無用たるべく候殊更出家として俗家へ参り談議申問敷候、況んや風俗として軽々敷仏説沙汰の限りに候、近来件の輩有之徒党を結ぶ儀江戸御大禁に候条、士、町、在郷に至る迄此旨よくよく申渡さるべく、儒道を相嗜み候様肝要たるべき事

幕府の仏教統制をうける形で藩は、説教を手段に僧侶が俗家と接することに強い警戒心を抱いていたのがわかる。

だが、宗旨改めが実施されたものの、人びとを一向宗以外の特定寺院に所属せしめる形で詮議したわけではない。起請

文の提出を義務づけられたとしても、そのことは、寺檀制度の導入を踏まえて実施されたものではなかった。寺檀制度の是非論議はしばらく留保するとして、これまでみてきたような事情で沖繩の仏教は、臨済・真言主導により、那覇・首里を中心に国王をはじめとする支配者層を主たる信者・外護者としつつ展開されたのである。寺院は官寺と私寺に分けられ、建物の営繕から僧侶の諸費用に至るまで国によってまかなわれた。寺毎に知行高や扶持高が定められている。私寺は、官寺を退いた僧侶の隠居寺の性格を有していた。こうして僧侶の生活や寺院の運営が公費で保障される官寺制度がとられた結果、寺檀制度とは又別の意味で、僧侶の布教・教化に対する意欲を弛緩させてしまった面は、否めない。

(三) 明治・大正期の状況

明治時代を迎え、維新政府の断行した「琉球処分」によって沖繩は王制を解体せしめられ、日本の国家体制への統合を強いられていった。寺院の経営は、旧慣温存政策の結果王権時代の体制の急激な変化が避けられたため、当初は官寺制度が修正されつつも存続していたが、一九一〇(明治四三)年に「沖繩県諸禄処分法案」が施行され、公的保護からはずされ⁽¹²⁾。寺院は国債の利子をもって運営する方策がとられることとなった。官の厚い庇護を受けていた沖繩寺院は、秩禄処分後、一転して自立的な維持運営を迫られ、寺檀関係を持た

ないのも響いて次第に衰微の道を辿った。そして、例の沖繩戦で三カ寺を残し、烏有に帰したのである。

さて、仲尾次政隆亡きあと、沖繩の真宗信仰は、備瀬知恒に受け継がれる。備瀬は、一八七六（明治九）年に東本願寺より布教の任を命ぜられ派遣せられた田原法水と出会い、その活動の補佐役をつとめ、信仰拡大に貢献した。鹿児島県では同年、真宗信仰が解禁となったとはいえ、沖繩では依然禁圧の空気に包まれていた。そうした状勢下、再び真宗信者の処分が強行された。仲尾次らにつづき、またも法難をこうむったのであった。大分生まれの田原は検挙をまぬがれた。しかるに事態を座視できない田原は、一八七八（明治二一）年二月、法主大谷光勝より琉球藩王へ宛てた信仰解禁の願書を提出している。⁽¹³⁾

今般本宗教義布演の爲め教導職候補田原法水外二名出張申付け 御管下適宜の地に於て仮に教場を設け衆庶一般教導致させ度儀は全く四海兄弟の情宜を厚ふし 本宗二諦の宗義を宣揚し 王法為本仁義為先 而かも念仏成仏の信心を以て現当二世の利益を得しめ度赤心より外他念無之候 就ては同人共寄留中諸般御保護に預かり度願上候 尚今後永く交際の微衷を表する爲め 本宗崇敬の經典三部妙典一帙並に不腆の国産一箱進呈候条前陳御諒察の上御領取相成

度此段及御依頼候也

明治十一年二月

真宗東派管長

大教正 大谷光勝

琉球藩王尚泰殿

琉球藩庁は、しかし、布教禁止を改めて通告する。そこで田原は、内務省沖繩出張所の許可を受け、那覇の泉崎に仮設教所を設けて布教を続行した。対する藩庁は布教禁止の願書を内務省出張所に出すが、明治九年、実はすでに「其藩治の内、裁判の儀は自今其地に在る内務省出張所に被附」との指示が出されていた。したがって先述の真宗信者処分はこの令達に反することになる。ために藩庁は、明治十一年八月、処分強行に対する始末書を書いている。結局十一月、内務省から藩庁に譴責の達しが出された。⁽¹⁴⁾

其藩ニ於テ管下人民、真宗信仰之者ヲ、私ニ処刑候段、御達之旨ニ戻リ、不束ノ至ニ付屹度御処分可相成之処、全ク藩吏之失錯ニ出候趣ニ付、今般之儀ハ特別之訳ヲ以、寛典ニ被処候条、右処刑之者解放及贖金返還等取計ヒ、且失錯之藩吏ハ相当ノ処分致スヘク、此段相達候事

これを受けて真宗側は、沖縄官憲との談判を行い、次の条件で決着をみたとい⁽¹⁵⁾う。

一、処刑者の解放と罰金の返還

二、布教は寄留商人（鹿児島や大阪など）を対象とする。沖縄人の聞法は認めない。

三、寺院建立は許可しない。借家を布教所とすること。

このように、限定付きではあったが、真宗の信仰は禁を解かれたのである。そして、全面的に布教の自由が認められたのは、一八七九（明治一二）年一月とされる。

また、浄土真宗本願寺派の沖縄開教は、同年に宮崎県の大河内正念によってはじめられた。その後一八九八（明治三一）年、鹿児島県の亀井慈が来島し、那覇の借家で一三年間布教をつづけた。さらに一九一〇（明治四三）年、やはり鹿児島県の菅深明が本山の指示で訪れ、那覇上ノ倉の民家を借り、布教活動に入った。翌年、説教所を那覇松下町に移して、主に内地の寄留商人や官吏を対象として教化を実践した。大谷派は当初、遊女を主たる信者としたものの、その後、本願寺派同様寄留商人を教化の中心に据えていったようである。

一九一八（大正七）年、那覇松山町に大典寺が建てられ、菅が初代住職の座についた。菅は、時期が前後するが、一九一二（明治四五）年に沖縄感化院、大正七年には沖縄家政女学校を設立し、各地の布教所の開設と並行して社会—文化事業に

も精力的に取り組んでいる。

日蓮系の布教は、他宗に比べて最も後発とい⁽¹⁵⁾ってよからう。一九二一（大正一〇）年前後、鹿児島⁽¹⁵⁾の経王寺から僧侶が派遣せられ、布教を試みている。ただし、篤信者による布教は一八七八（明治一一）年頃より八重山で行われていた模様である。日蓮系では沖縄で最も古い妙徳寺の場合、現住職が五世にあたる。同寺は戦後三世のとき寺号を取得した。この三世と現住職の父が友人であり、事情で父が四世を継いだのだという。

四、戦後の復興へ向けて

一九四四（昭和一九）年一月一日の空襲で、那覇は焦土と化した。戦災をまぬがれたのは、すでに触れたとおり、金武の観音寺ほか二カ寺を数えるのみであった。檀家を持たず国家の庇護によって経済基盤を維持してきた沖縄の寺院は、民衆との接点を欠き、したがって琉球処分後の秩禄奉還の結果、金禄公債の発給を受けたものの衰退への動きに歯止めをかけることができなかった。そこに沖縄戦の打撃が加わり、当地の仏教は壊滅状態に陥ったのである。寺院を失ったのみならず、僧侶の死も招いた。六名が戦・病死したとされる。なお、戦前の寺院数は三〇カ寺前後、僧侶数はおよそ四〇名であった⁽¹⁶⁾。

しかし、僧侶たちの戦後の立ち上がりは早かった。「そろ

ばん玉の焼け残りを拾って数珠を作ったり、配給された緑色の蚊帳で法衣を作り自転車のベルで打ち鳴らしの鐘に使用したり⁽¹⁷⁾して、活動を再開した。一九四八（昭和二三）年、那覇の開南に護国寺、首里に万松院・観音堂・遍照寺、糸満に蓮華院、宜野湾の普天間に神宮寺が仮復興された。翌年万松院住職は首里地区の戦死者の遺骨を埋葬し、菩提を弔っている。また護国寺・大典寺両住職は、遺骨収集の活動に従事している。一九五〇（昭和二五）年、右の両住職はキリスト教連盟と手を結び、沖繩平和連盟を結成する。翌年には、沖繩仏教会が再組織されている。沖繩仏教の近代以降の流れを振り返ったとき、特筆すべきは、超宗派的な寺院連合が装いを変えつつ今日に及んでいる点であろう。明治末期の和潤会から大正期の沖繩仏教連合会へ、そして戦後の沖繩仏教会、さらには現在の沖繩県仏教会とつづく連帯の系譜がそれである。現在の状況については後述することになる。先にあげた沖繩仏教会は、花まつりを主催し、市民団体の参加を募り、戦後の沈んだムードの一掃をはかった。翌五二（昭和二七）年、護国寺・大典寺両住職は沖繩児童文化協会、沖繩救癩協会を設立している。そして仏教会主催で戦没者遺族大会が開かれた。同年九月には、大阪の四天王寺管長ら一行が来訪し、慰霊法要や施設慰問などを行っている。戦後初の内地僧の弔問であったという。翌月、今度は護国寺・大典寺両住職が関西

方面に赴き、沖繩仏教の実状を説いて回り、仏像・仏具を譲り受け、それらを県内各寺院に提供した結果、施設や法務の体裁が何とか整った。

戦前から戦後、わけても戦後の沖繩寺院の活動は、文化・福祉・教育といった広い視野に立って積極的になされていたようだ。街は廃墟と化し、多くの人を失い、生存者は深いトラウマを負うといった異常事態に直面し、かつまたそのトラウマを共有する当事者の一人として、僧侶たちは、宗教者たる使命を強く意識せざるをえなかったのだろう。施設や仏具などの条件が整う前に、逸早く遺骨収集や慰霊法要を執行するとともに、復興のための社会―文化的リーダーの役割をも果たしている。福祉・教育重視の教化姿勢は、真宗両派や真言宗の一部を中心に昭和三〇年代まで推し進められていたようである。そしてその後、臨濟宗寺院の一部や浄土宗寺院がかかる施策をとり入れ、現在では日蓮宗の一部でも実践されている。真宗本願寺派大典寺の例をあげれば、戦後「日曜学校」を開き、子供を主たる対象に遊びの要素もとり入れながら、教化活動を試みていた。けれども、家庭にテレビが普及するにつれ、子供たちは次第に顔を見せなくなってきたのと。今は「日曜礼拝」を毎週行っている。こちらは一転して老人主体で、読経と法話を中心とし、一五、六名から多いときで三〇名位参加する。かつては各地の自治会に働きかけ、

夜間に、スライドを活用した法話による教化もやっていた。が、日曜学校同様やはりテレビの力に押されてか、人が集まらなくなり、結局活動は途切れてしまったそうである。

(五) 現在の状況

次に現状をみていこう。沖縄県の統計にもとづけば、一九九五(平成七)年四月一日現在、法人格を有する仏教寺院は、四五カ寺を数える。なお県の統計は立正佼成会を合算しているが、ここでは一応仏教寺院から除いて考える。ちなみに、神道系法人が一五件、キリスト教系が八六件、諸教系(天理教の分教会が主)が二二件存在する。数の上では、キリスト教系が仏教系のほぼ二倍にのぼり、沖縄における最大宗教勢力となっている。しかるに近年、非法人寺院が都市部を中心に増加傾向を呈し、また既存寺院が先島を含む各地に別院・布教所・説教所などと称する新たな活動拠点を設ける動きも目立ちはじめ、寺院の実態把握は必ずしも十全になされているとは言いがたい。真宗本願寺派の場合でいえば、県の統計では六カ寺を数えるが、実際には一九九四(平成六)年二月の時点でほかに八カ所の布教所を有している。それらは、浦添・石川・名護の各市や今帰仁・北中城の各村、さらには石垣・久米・竹富の各島に及んでいる。

四五カ寺のうち、二〇カ寺が那覇に集中し、残りの二五カ寺が他地域に広く散在している。その宗派別内訳は、次のと

おりである。臨済宗妙心寺派が一四カ寺で最多を占め、ついで真言宗が九カ寺あり、高野山真言宗三、東寺真言宗五、真言宗智山派一の割合となっている。浄土真宗は八カ寺で本願寺派六、大谷派一、仏光寺派一の構成である。浄土宗は三カ寺だが、あと二カ寺存在しているのが実状だ。日蓮系は八カ寺。すなわち、日蓮正宗五、日蓮宗二、本門仏立宗系の単立寺院一の内訳である。ほかに金峰山修験本宗が二カ寺、曹洞宗が一カ寺存する。

以下では、沖縄の仏教を俯瞰したときに注目されるいくつかの特徴を指摘する。以下では、沖縄の仏教を俯瞰したときに注目されるいくつかの特徴を指摘する。以下では、沖縄の仏教を俯瞰したときに注目されるいくつかの特徴を指摘する。

まず第一にあげるべきは、人びとの宗派意識の希薄さであろう。そのことは、薩摩藩の管轄下に置かれながらも、檀家制度が敷かれなかったという歴史的背景を映し出している。ために僧侶たちは、仏教の教えを正面から説示するのではなく、むしろ福祉や教育、文化などに関する活動を盛り込みながらの教化を企図したのだといえる。新来の浄土宗袋中寺や日蓮宗法華経寺では、今日でもこうした方策に力を入れていく。袋中寺にあっては、糸満に乳児院や養護施設など四つの福祉施設を作り(礼拝施設も備えている)、「揺りかごから墓場まで」を視界に入れた寺院活動を実践している。乳児院を作った理由は、沖縄の抱えている米兵との間の孤児問題に対処するためであった。住職はまた、教誨師もつとめ、ロータリ

ークラブにも所属している。

法華経寺では、非行歴のある青少年や登校拒否児の保護・教化・更生を活動の眼目とする。昭和五〇年代はじめから沖縄での布教を開始したが、以来あずかった青少年は数百人のぼるそうだ。ただし九州方面からの志願者もいる。いわば内弟子として「行学寮」と呼ぶ施設に寄宿させ、「給仕」を最重視し、その上で「行（唱題行）」、「学」の指導を行う。つまり、生活を通しての教化をめざすのが基本姿勢である。加えて日曜日には、唱題行と法話を主とする日曜学校を開き、これらの親にも参加を呼びかけている。

一部の寺院で、こうした試みがそれなりに成果をあげている。だが大半は、葬儀や追善供養の依頼に追われて、ほかの活動にまで手が回らないのが実状のようである。かつてはユタなどの民間職能者主導で死者儀礼を行うケースが目についたが、近年は、寺院に直接あるいは葬祭業者を通して依頼する例が顕著な増加をみせている。そうした限りでは、表面上他県と同様の傾向が当地でも強まってきた印象をうける。しかしその実、他県と一括りにできない性格を内包しているのである。葬儀と追善供養を別々の宗教者に頼む形が、かなりみられるのだ。それも僧侶間においてだけでなく、民間宗教者も含めて行われている。なかには、日時をずらして僧侶と民間宗教者が儀礼にともに関与する場合も認められる。儀礼

の日取りをまず民間宗教者の判断で決定してから、僧侶に導師を依頼する例も稀ではない。とまれ、葬儀・法要の導師の執行が、すなわち依頼者とのその後における固定的な関係を生む契機とはほとんどなっていないのが現実である。

ところで、ユタなどの民間宗教者が葬儀・法要に密接に関わってきた背景に、沖縄特有の祖霊観を見出すことができ。柳田國男が説くところでは、日本人の伝統的な先祖理解によれば、死霊は弔い上げを経てカミと化すという⁽¹⁸⁾。この「死霊→カミ」の観念は、沖縄の場合とりわけ顕著にみられる⁽¹⁹⁾。ただ、カミと化すと観念される時期は必ずしも一定していないようである。むしろウワイスコー（終わり焼香→弔い上げ）以前にそう意識される例が少なくない。筆者の聞きとりでは、二五年忌のニンチスコー（年忌焼香）で死霊は天に上り、カミとなるから「アカ（お祝い）」だとされ、布施を祝儀袋に入れて持参する例がままあると語る住職もいた。当住職は、こうした「アカ」の慣行を改めようと指導しているようである。

かかる状況のもとで、では一体どうしたら人びとの宗派意識を醸成させることができるのか。沖縄仏教の担い手たちが最も腐心するところである。この点に関し、二つの道が志向されているようだ。一つは、葬儀・法要を説教の場として積極的に活かそうとする立場である。こうした姿勢は大半の僧

侶に通底するが、実際にはあまり功を奏していない。総じて規模の小さい寺院や自宅などの会場に、多数の参列者がつめかけるのが沖繩特有の仏事風景であり、したがってあわただしく儀礼が執り行われ、遺族も参列者も落ち着いて座を温めていられず、聞法どころではないというのが実体と聞く。そこをどう打開するか。意気込みとは裏腹に、有効な手段を見出しえないといった、一種の隘路に直面している感がある。

もう一つ指摘しうるのは、寺院・僧侶が宗派を超えて連帯することで意見交換の場を持ち、かつ組織的に文書活動や行事を開催しようとする立場である。宗派間にもられるこのよな風通しの良さは、すでに明治期からの伝統であり、そうした意味では新たな試みというよりも、むしろ旧来の路線の踏襲と解すべきであろう。沖繩県仏教会なる寺院連合がそれである。一九九〇（平成二）年次で二六カ寺が加盟しており、うち九カ寺が戦後新たに将来された寺院である。若手僧侶の会員で構成される青年部が中心となって、文書伝道のために「れんげ」という会誌を年三回発行している。かれこれ一五年ほどつづけられているそうである。

県仏教会は、かつての沖繩仏教会の発展形態とみなしうるが、それとは別に、より包括的な組織が近年結成された。「沖繩宗教者の会」と名づけられ、仏教・キリスト教（カトリック系）・神道・新宗教が各々の宗旨の相異を超え、「平和の祈り」

なる共通目的のために大同に就いて実現したものである。目下の活動の核となるのは、毎年八月一日に催す「祈りと平和の集い」である。一九九二（平成四）年度を例にとれば、次のような次第で執り行われた。

雅楽、天理教

開会の言葉、キリスト教

平和への祈り、天理教・金光教

献舞、神道

祈りの言葉、沖繩県遺族連合会

立正佼成会

天理教

世界連邦日本宗教委員会

聖職者挨拶、仏教

セレモニー、PLほか

閉会の言葉、神道

雅楽、天理教

（司会、仏教）

「平和の祈り」という一点に向けて、日頃教線を張り合っている異宗教が大同団結しうるところに、特異な戦争の歴史を刻印された沖繩独特の精神風土が透察されてこよう。

ほかに、「南無の会」にヒントを得た「般若の会」が組織されている。デパートを会場に「喫茶説法」と銘うっておおむね週一回、僧侶と有識者を講師に説教活動を行っている。始めてから一〇年位になるという。

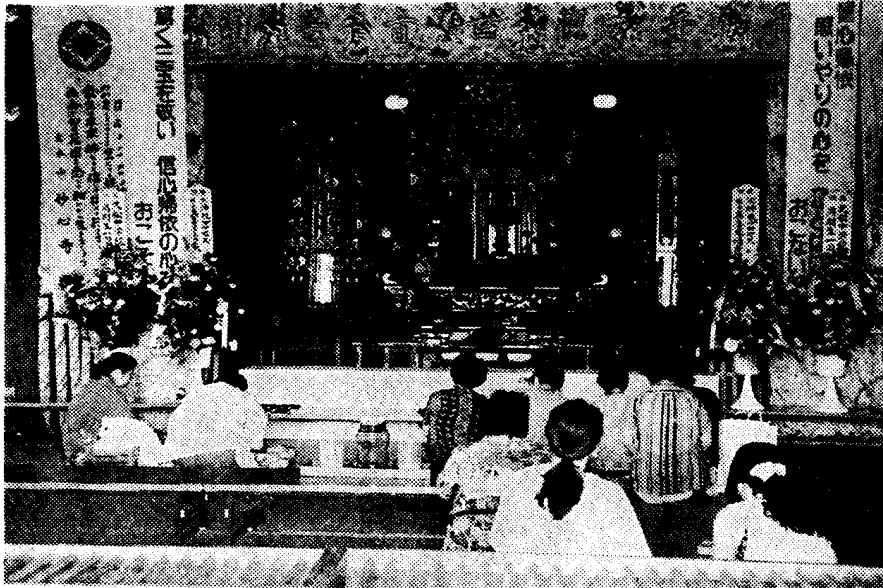
こうした連帯への動向は、しかし、沖縄仏教全体をカバーして進んでいるわけではない。先述のとおり、県仏教会の加盟寺院は平成二年次で二六カ寺あり、現在も大差ないのに対して、平成七年度の県統計による法人格を有する県内寺院数は四五カ寺を数える。仏教会非加盟の寺院もかなりあることがわかる。さらには非法人の寺院も増えてきている。管見では、仏教会非加盟寺院の中に、個性豊かな活動を実践している例がむしろ目につく。社会に適応しきれない青少年と寝食をともしして教化を試みている法華経寺も、その一つである。また、本門仏立宗から袂を分かった本門仏立講（本部は、鹿児島の本薫寺）の沖縄支部・仏立寺も独自の道を切り開いている。その特徴は徹底した「現証」主義にあり、「御経力」によって現証を得せしめることで、最終的には菩薩道を歩ませるのが布教の眼目であるという。現証実現のための修行として、唱題行を最重視する。加えて、先祖供養の励行を強調する。その際の先祖は、双糸を範囲とした「総先祖」を意味している。さらに特徴的なのは、先祖供養の目的は死者自身の成仏を願うところにあるのではなく、死霊を再び生まれ変わ



沖縄金峰山修験本宗の中心的存在である
田場天龍氏

らせ、同宗と縁を結ばせて菩薩行を実践せしめたのちに成仏へと導く、いわば「信者成仏」ともいうべき即身成仏をめざすことだとされる。したがってこの論理を敷衍すれば、同宗の信者となって信心を深めることが、すなわちみずからの成仏への道につながるわけである。かくて「御講」と呼ぶ信者たちの集まりなどを機に、信者自身が折伏を展開している。それから、金峰山修験本宗の活動も注目される。ユタの修験僧化という現象がみられるからである。その場合、ユタの姿勢は大きく二つの方向に分かれる。一つは、僧侶としての帰属意識を強め、むしろユタ信仰にあらがうタイプ。二つめは、金峰山で修行した体験や知識を、従来行っていた祈禱方

法に加味し、参考に供しようとするタイプで、僧侶の資格は取得しても実質は依然ユタであるような例。具体的には、祈禱の際、グイスと呼ばれるユタ特有の呪文を唱えるが、それに加えて経文もあげる形式がよくとられる。その意味では、たとえ後者のタイプといえども、仏教の修行を体験した裏づけが、ほかのユタ仲間とは異なる一味違ったユタを自覚せし



沖縄寺院の参拝風景

める働きをしている面も否定できないと思われる。ユタと修験との関係については、ユタが依頼者を連れて臨濟宗寺院を中心に参拝、祈願して回る「十二カ所回り」の慣行と合わせて、いずれ稿を改めて詳しく論じたいと考えている。

三、おわりに

以上、沖縄の仏教の歴史と現状を鳥瞰してきた。稿を締め括るにあたり、その諸特徴を改めて整理し、論旨を浮き彫りにしたい。

(1)、沖縄の仏教は、臨濟・真言両宗を中心に展開されてきた。それは現在も変わらないが、ただ近年になって様々な宗派が加わり、当地の仏教の構成は、次第に複雑化の様相を強めている。

(2)、概して新来の日蓮系寺院には、宗派性を前面に押し出した活動を繰り広げる例がみられるもの、大半の寺院は、宗派の顔がはっきりしない。

(3)、そうした宗派意識を人びとにどう植えつけるかが、総じて僧侶たちの課題であり、悩みでもある。

(4)、葬儀・法要の依頼に追われる寺院が多くを占める。檀家制度の存在しない沖縄では、寺院の経営はきわめて不安定である。葬儀・法要の布施が主要な収入源となっているが、

儀礼の執行が依頼者との恒常的な関係の形成に、ほとんど結びつかない。そのことが寺院経営の困難さを増長させている。

(5)、宗派性の希薄さは、転じて、宗派間の連係への道を開くことにもなった。近年は、この動きが色々と試行されている模様である。

(6)、ユタの「十二カ所回り」と称する寺院参りや、修験僧化など、在来信仰の担い手であったユタの仏教への接近が、この頃強まりつつあるようにみえる。その結果、かれらの一部に神観念や祈禱手法の変化が認められるようになった。

こうして導出された諸特徴を踏まえ、次には、特定宗派をめぐるインテンシブな報告を試みたいと考えている。

註

(1) W・P・リーブラ『沖繩の宗教と社会構造』弘文堂、一九七四年、一一九頁。また、窪徳忠「沖繩の宗教概観」(『季刊現代宗教』一一三、エヌエス出版会、一九七五年)を参照されたい。

(2) 知名定寛『沖繩宗教史の研究』榕樹社、一九九四年、二〇九頁。

(3) 葉貫磨哉「日本禅宗の琉球発展について」(『駒澤史学』第七号、駒澤大学史学会、一九五八年)を参照されたい。

(4) 名幸芳章『沖繩仏教史』護国寺、一九六八年、一〇頁。

(5) 同右。

(6) 知名前掲書、二四五頁。

(7) 『浦添市史』(第四卷)浦添市教育委員会、一九八三年、三一―三二頁。

(8) 玉代勢法雲『真宗法難史』布哇佛教會、一九二八年、一二頁。

(9) 同右書、一六頁。

(10) 同右書、二〇頁。

(11) 同右書、八頁。

(12) 『那覇市史』(通史篇第二卷)那覇市役所、一九七四年、二〇六頁。

(13) 玉代勢前掲書、五〇―五一頁。

(14) 『那覇市史』、一九八頁。

(15) 名幸前掲書、一九頁。

(16) 同右書、五六頁。

(17) 同右書、五七頁。

(18) 柳田國男「先祖の話」(『定本柳田國男集』第十卷)筑摩書房、一九六九年。

(19) 藤井正雄「沖繩における墓供養」(渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社、一九八九年)、赤嶺政信「沖繩の靈魂観と他界観」(同書)を参照されたい。